

次世代の日本画家に向けた絵絹文化の周知方法の提案

中川 浩太郎 (金沢美術工芸大学大学院)

1 研究概要

現代には数多くの絹本彩色による日本絵画の名品が伝えられており、我々を魅了してやまない。それらは、制作された当時の日本に「絹に描く文化」(以下、絵絹文化)が根付いていたことを証明している。しかし、現代日本画の制作シーンでは、和紙と比較して絵絹を基底材とすることは何らかの理由で敬遠されているようで、これは絵絹文化の衰退を助長する事態といえるのではないだろうか。本研究では、絵絹文化の次世代を担う「日本画を学ぶ学生」に焦点を当て、彼らに向けた絵絹文化の周知方法の考察を目的とした。この目的の遂行にあたり、まず絵絹の魅力について再確認し、次に彼らが絵絹を使用した制作を敬遠する理由を明らかにした。そして、これらを踏まえて周知方法を考察した。

2 絵絹の魅力の調査

絹の生産の歴史と魅力を確認するために世界遺産でもある群馬県・富岡製糸場を訪ねた。養蚕から絹が出来上がるまでの工程を確認し、工場で効率的に絹糸を生産する仕組みや大量生産を実現するまでの軌跡を当時の空気を感じながら振り返った。そして多くの知恵と労働の上に、私たちの絹本彩色による作品制作が成り立っていることを実感した。また、「上州座繰り機」を使用した生糸作りを体験し、繭玉から生糸が紡がれる様子を間近で確認した。絹は蚕が成虫になる過程で作る繭が原料であるが、蚕の生命の犠牲がなければ美しい生糸が出来上がらないと考えると、絵絹も同様であり一層貴重な材料であることを痛感した。



「上州座繰り機」を使用した生糸作りを体験する様子

自身の作品制作では、絹本彩色画の制作を継続することで、実際の使用感から学生の視点で絵絹の魅力を探求した。これにより、透過性素材のため下図を本紙に正確に転写しやすい点や、絹枠を使用するため裏面からの制作も容易な点、パネル等で覆われていないため乾きが速く効率よく彩色できる点などの利便性を認識した。また、絹本彩色画を制作したことで、紙本彩色画の制作にも良い変化が現れた。具体的には、絵具の塗り重ね順を以前に増して慎重に考えるようになり、筆を使用した絵具の塗り方も図様に応じて工夫するようになった。これは、一筆一筆の仕事が如実に出来映えに影響する絹本彩色画の特徴によって、日本画絵具の効果的な使い方を学習できた成果と確信する。絵絹の魅力を考察する中で、絹の動物由来の素材だからこそ付随する印象に、自分の求める作品性との親和性を感じる学生もいるだろうと考えた。また、絹で制作する上での利便性からも、学生にとって絹は決して敬遠されるような基底材ではないと実感した。

3 絵絹について記述された書籍の調査

学生が独自に絵絹に関してどのような情報が得られるのかを明らかにするため、日本画の技法書や入門書中の絵絹に関する事項の状況を調査した。実際に多くの学生が参照している金沢美術工芸大学付属図書館の蔵書を調査対象とすることとした。文献数は12冊¹。

調査文献全体を概観すると、和紙に描くことを前提とした書籍が多く、絵絹に描くことに関する記述は少なかった。その記述の詳細を確認したところ、絵絹という素材についての説明と絹本彩色画の制作方法の説明の2つに大別できた。絵絹という素材についての説明は多くの文献中に確認できたが、絹本彩色画の制作方法の説明には、情報に偏りが見られた。制作方法（右図『絹本彩色画の主な制作工程』参照）のうち、「絵絹の張り方」「ドーサ引きの方法」については多くの技法書で紹介されている一方で、「絹枠の制作方法」「裏打ち・軸装・パネル張り」の項目は掲載が少なかった。「砧打ち」という絵絹を平滑にして光沢感を出す項目は特に掲載が少なかったが、この項目は絵絹の素材の魅力を引き出す上で非常に重要な項目でもある。また、今回の調査では、制作工程の一部始終を詳らかに説明するような文献は確認できなかった。

前述のように日本画の技法書や入門書は、和紙に描くことを前提とした書籍が大半を占めており、絵絹に関する情報は限られている。現状では、学生に制作意欲があっても情報不足から絹本彩色画を敬遠せざるを得ない可能性があるし、そもそも、日本画は和紙に描くものだという固定概念を、日本画を始める学生に植え付けかねないのではないだろうか。

4 学生への絵絹の使用に関するアンケート調査

実際に学生が絵絹に対してどのような意識を持っているのかを明らかにするため、全国の美術大学の学生を対象として、絵絹の使用に関するアンケート調査を実施した。協力を得た大学の研究室は、愛知県立芸術大学日本画研究室、金沢美術工芸大学日本画研究室、京都市立芸術大学日本画研究室、東京藝術大学日本画研究室、東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室(50音順)の5研究室である。総回答者数は122名であった。

アンケート調査の設問は以下のQ1～4である。この他に自由記述欄を設けた。

- | |
|--|
| Q 1 好きな作品で絹に描かれたものはありますか。(回答選択形式) |
| Q 2 絹に描いてみたいと思いますか。(回答選択形式) |
| Q 3 絹本に関する授業以外で、絹に描いたことはありますか。(回答選択形式) |
| Q 4 絹に描くことにどのようなイメージをお持ちですか。(記述形式) |

絹本彩色画の主な制作工程

下図制作
絵絹を購入する
砧打ちを行う
絹枠を準備する
絵絹を絹枠に張る
ドーサを引く
彩色する
木枠から外す
裏打ちする
パネル張りまたは軸装

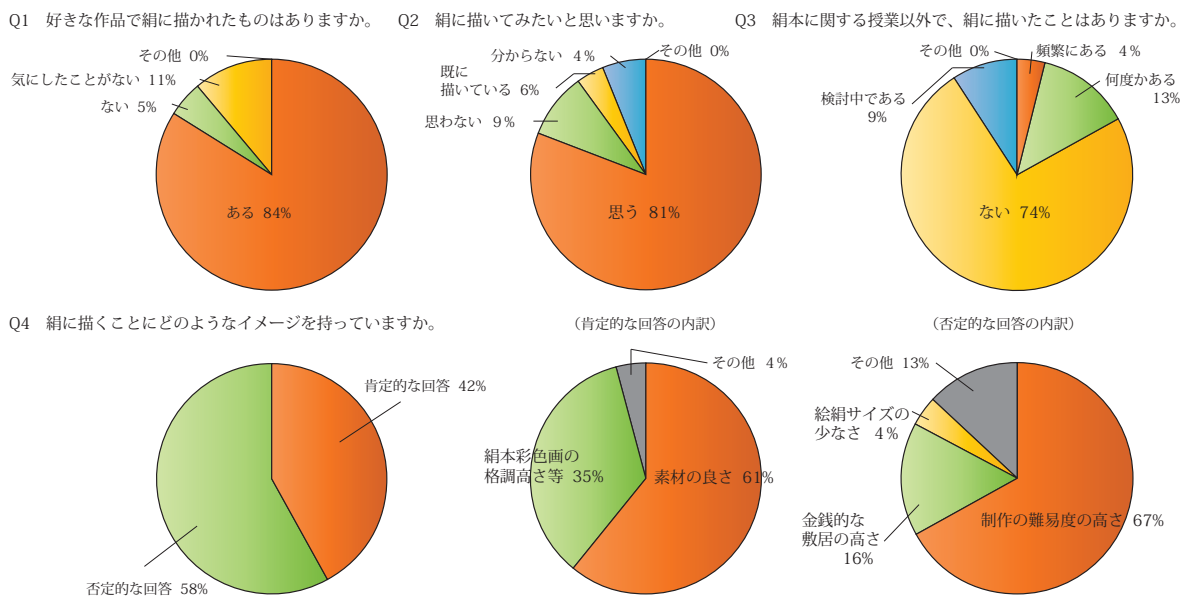
※自身の制作工程に基づく

以下に、アンケート調査の集計結果と考察を記述する。まず、Q 1～3の回答の集計結果からは、回答した学生全体のうち約8割の学生が絹本彩色画に好意的な印象を抱いており、自身の制作に活用したいと考える学生も同程度いることが分かった。その一方で、回答した学生のうち7割の学生は、授業以外での使用経験がないことも分かった。この知見から、絵絹を基底材とした作品制作への意欲があるにも関わらず、実際に自主制作するには至らない戸惑いの現状があることを理解した。

Q4は記述式（複数回答可）の質問である。回答者は、A4用紙4行分程度の枠内に箇条書きする。この質問に対する回答では、絵絹の使用について肯定的な回答が42%、否定的な回答が58%であり、否定的な回答が上回る結果であった。肯定的な回答としては、作品の出来映えに関わるメリットを述べるものが多かった。一方で、否定的な回答としては、金銭面による準備のしづらさや制作時の素材の扱いづらさについて述べるものが多かった。絹が貴重な素材である点や、技法書などで取りあげられない点がマイナスイメージを生み出しているのだろうか。

この絵絹の使用に関するアンケート調査からは、絵絹という素材の持つ美しさが作品の出来映えに及ぼす影響を理解し肯定的に受け止めつつも、素材の扱いや準備にかかる時間・資金を否定的にとらえているという学生の現状が明らかになった。つまり、学生が絵絹を基底材として制作することを敬遠する背景には、素材の扱い方への不安や準備にかかる時間・資金面の負担を重荷に感じているという要因があると言える。このことは学生が「絵絹の制作上の欠点>絵絹の表現上の利点」と考えているとも言い換えられる。ここで強調しておきたいのは、回答者のうち74%の学生は自主制作で実際に絹を使用したことがないという事実である。私もそうであったが、自主制作で絹を使用してみれば、考え方は必ず変わるはずである。

絵絹の使用に関するアンケート調査の集計結果



5 周知方法の考察

以上を踏まえて絵絹文化の周知方法を考察した。残念ながらアンケート調査では、「絹に描くということを意識したことがなかった」という回答もあり、「和紙に描くことが当たり前」となっている風潮が、絵絹が敬遠される潜在的な要因となっている可能性も考えられる。そこで現段階ではまず、学生の身近に自主制作でも何度か絵絹を使用したことがある学生を増やす、地道な周知活動が必要だと考えた。このことは自身の経験からの実感でもある。

研究期間中には、自身の制作した絹本彩色画の展示や、絵絹の使用方法をティーチングアシスタントとして助言できる好機を得た。その際に絵絹文化を学生に周知できないか試みた。展示では、基底材が絵絹であることを説明して鑑賞者である学生の興味を高め、学生自らが積極的に疑問を持ち、その学生が絹本制作に挑戦できるよう多くの質問に実践的な回答を示した。また、本学のティーチングアシスタントに従事した際は、絹本彩色画の経験者としてのコツや絵絹の利便性・魅力を学生同士の価値観の共有の中で伝える努力をした。この実践によって、何人もの学生が絹本制作を自主的に実施しはじめた。同じような境遇の学生が絵絹を使用しているという事実は、絵絹を使用してみたいが手を出せずにいる学生にとっては心強く感じられるのではないだろうか。絹本制作を始めたそれらの学生は制作技術に関して疑問があると私を訪ねてくれることも多かった。

その他の実践としては、前述のアンケート調査に回答した学生全員に絵絹のサンプルを配布した。些細なものであったが、絵絹を身近に置いてもらうことによって絵絹文化の周知の一助となることを願ったのである。

絵絹文化は和紙の文化と比較すると衰退が著しい印象がある。絵絹の種類やそれぞれの幅の選択肢の少なさ、手織りにしても機械織りにしても入手の厳しさはその印象を強めている。絹本制作をより多くの画家が行うことにより絵絹文化は活性化され、再び魅力ある日本画の発展につながるのではないだろうか。これは同時に日本の重要な文化の保存でもある。

今後の検討課題としては、絹本彩色画の制作工程を誰もが身近に視聴できる動画で紹介する方法の有効性を考えている。制作工程ごとに失敗例や修復方法を交えた短編動画を編集し、無料動画サイトで公開すれば、学生が制作の不安を払拭する手助けになるのではないだろうか。

謝辞

本研究に対しご協力くださいました愛知県立芸術大学日本画研究室、金沢美術工芸大学日本画研究室、京都市立芸術大学日本画研究室、東京藝術大学日本画研究室、東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室(50音順)の先生方ならびに学生の皆様に心より感謝致します。

注釈

1 上田臥牛『日本画の技法と制作』(1981)日貿出版社／大島祥丘『日本画の描法 第1巻』(1985)日貿出版社／大島祥丘『日本画の描法第2巻』(1986)日貿出版社／大島祥丘『日本画の描法 第3巻』(1986)日貿出版社／大島祥丘『日本画の描法 第4巻』(1987)日貿出版社／畠中光享(画) 見聞社編集『人気作家に学ぶ日本画の描法⑥人物を描く』(1994)同朋舎出版／見聞社編集 林功・箱崎睦昌 監修『人気作家に学ぶ日本画の描法②画材と技法』(1994)同朋出版社／小野大輔『仏画の描き方 絵絹での作品作り』(1997)日貿出版社／京都造形大学編『美と創作シリーズ 日本画を学ぶ①』(1998)角川書店／京都造形大学編『美と創作シリーズ 日本画を学ぶ②』(1999)角川書店／東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室編『図解 日本画の伝統と継承 素材・模写・修復』(2002)東京美術／小川幸治 編著『日本画画材と技法の秘伝集』(2008)日貿出版社